

眼差しの先に

—小林信一先生のご退職に寄せて—

名古屋大学高等教育研究センター助教

齋藤芳子

小林信一先生のご退職にあたって、本特集号にも先生の数多くの御功績—書き物についても、高等教育行政や科学技術イノベーション行政における貢献についても—が記されることだろうと思います。その先駆的で、幅広く、時に理論的で、また時には実践的なご活躍は、多くの研究者の知るところでしょ。さらに広島大学では、センター長に加えて、研究科長までも兼任なさることとなり、まさに八面六臂のご活躍でいらっしゃいました。

そのような表のお姿からは、ご多忙といえども順風満帆な学究生活を送られたように想像してしまいそうです。しかし、実際には、さまざまな出来事とともに過ごしてこられたことをご存知の方も多いのではないのでしょうか。なかでも、2002年秋に独立行政法人産業技術研究所（産総研）のなかに新しく「技術と社会研究センター」（CTS）を立ち上げてセンター長に就任され、たった1年半でセンター廃止に追い込まれた、あの頃のことは、おそらく小林先生にとっても今なお忘れえぬ出来事なのではないかと思ひます。

ちよっぴりネガティブな記憶をご退職記念という場で披露することには少し躊躇いもあるのですが、それでも、あの時の小林先生には凄味がありましたし、全力で守っていただき、気にかけていただいた部下の一人としては、書かすにはいられないというところ。ちなみに、CTSでは不祥事があったわけでもなく、最初の半年はまだスタッフがいなかったのて正味1年しか活動していないなかで廃止になるという急展開は、後味の悪いものでした。

しかしなんといつても、もともと小林先生の本務であった筑波大学大学研究センターの助教授の職も、CTS 立ち上げ以前から兼務されていた社会技術研究システム（後の社会技術研究開発センター。これも科学技術振興機構に新設されたものだった）のディレクター職も、CTS 廃止と同時に小林先生がすべて退任されたのには、ただただ驚かされました。しかも、先生の口からざらりと語られたのはなんとも明快な理由で、「若い人たちについてきてもらったのに、その人たちが職を失うという時に自分だけ安泰なところにいるわけにはいかない」というものでした。この時になって初めて、科学技術政策研究所（当時）で部下だった私をこのCTSにスカウトして下さった小林先生のリーダーとしてのご覚悟を知ったのですから、なんとも不肖の弟子です。

もちろん、部下たちの次の職についても骨を折って下さいました。とはいえ、自然科学系から転身して間もない私は、行き場を失う可能性が非常に高いと思ひていました。そんなとき、小林先生に喫茶店に呼び出されたのです。愛煙家だった当時の小林先生との打ち合わせ（という名のメンタリング？）は、しばしば禁煙の職場を離れて、近くの喫茶店で行われていました。出向いた先には、小林先生、お隣には奥様がいらっしゃって、CTSで行っていた「研究者のノンアカデミック・

キャリアパス」という科学技術振興調整費のプロジェクトを産総研で続ける話がある，でも齋藤（筆者）がいないとこのプロジェクトはできないと思っている，どうしたいか教えて欲しい，どちらの答えでも自分は構わない，というお話をいただきました。やりたいです，と私が即答したものですから，「上司の言うことだからって聞かなくていいのよ，齋藤さんの人生なんだから」と奥様に心配していただいたことも，懐かしく思い出されます。

つくづく，小林先生の立居振る舞いは配慮に満ちている。そう気づいたのは，またしても後になってからでした。以前から面識のある奥様ご同席で，和やかな場だったこと。職を与えるというような素振りが一切なかったこと，私がNISTEP入りたての頃に，自分では研究上の問いにまとめあげきれなかったけれど気になっていたテーマに関わり続ける道を作ってくくださったこと。齋藤がいないと，という言葉で自信を持たせてくださったこと，どちらの答えでも自分は構わない，とおっしゃった後に視線を逸らして煙草を燻らせ，中立の姿勢を保たれたこと，等々……。私は，今でも，あの決断をあの瞬間に下してよかったと自信をもって言えるのです。

そんな小林先生でも，CTSがお取り潰しになる「かもしれない」という，宙ぶらりんの時期は，さすがにお辛そうなご風情でした。いつもなら，静かに示唆を湛えて飛んでくるはずの視線が，なかなか交わらなかつたように記憶しています。それでも，せっかくNISTEPから一緒に連れてきていただいたのにお役に立てていない，お荷物になっているのでは，私がそんな感覚になった時には，就業後を見計らってお電話をくださったことがありました。視線が交わっていないようでも，どんなに先生ご自身が大変な時であったなかでも，部下への眼差しに迷いも曇りもなかつたのです。

小林先生の眼差しの威力は，指導者としての役割だけでなく，もちろん研究にも，余すところなく発揮されていました。先生に導かれて，私は，知識生産システムのなかの小さな綻びや新たな芽吹きをいくつも見せていただきました。多様なトピックスに触れ，それらの繋がりを知り，時には政策現場に反映されていく様をも眺めることができました。これらはすべて，先生が広大な視野と高い分解能を，研究対象に対しても，メンタリングの対象者に対しても，持っていらしたからこそのことだったと思います。

実は，私と同年代の科学技術社会論関係者の間で，誰かがそろそろ「小林イズム」を引き継がないと，そんな凄い人材いるかしら，みんなで協力して補い合っていくのだろうね，などという会話をしたことがあります。直接的な師弟関係や上司・部下の関係になくとも，多くの若手が小林先生の眼差しに刺激を受けてきたと言えるのではないのでしょうか。そのようななかで，先生の眼差しを身近に感じることができた私は，とても幸運であったと思います。

小林先生には，「小林イズム」を継承しようとする私たちに，引き続きその眼差しを向けていただけますならば，至幸に存じます。

このたび広島大学の職を勤め上げられましたこと，心よりお祝い申し上げます。